

### 崇禅寺駅員として体験した空襲



石井 富恵（いしい とみえ）さん（86）昭和4（1929）年 大阪生まれ。  
9人兄妹の5番目の次女として生まれる。16歳で京阪神急行電鉄（現・阪急電鉄）へ入社し、配属されていた崇禅寺駅で昭和20（1945）年6月7日の第3次大阪空襲に遭遇。壮絶な爆撃の中を逃げて生き延びた。戦後70年に際し、自身の経験を手記にまとめた。東淀川区在住。

#### <取材メモ>

東淀川が空襲の被害を受けた昭和20（1945）年6月7日に、阪急崇禅寺駅で改札業務をしていた石井さん。本事業で戦争体験を募集していることを知り、当日の体験を便箋10枚の手記として東淀川区役所へ届けてくださった。インタビューでうかがったお話と合わせてまとめたものが本稿である。

#### 肌寒かった6月7日の朝

昭和19（1944）年9月に、京阪神急行（現・阪急）に入社しました。7人応募して、当時16歳だった私と、近所に住んでいた伊藤さん（17歳）、千国山の土井さん（14歳）の3人が採用されました。その頃から戦争が激しくなっていました。昭和20（1945）年6月6日は、南方駅の手前で焼夷弾がボンボン落とされていました。崇禅寺駅にいた私は、それを「明日こわいでー」と思いながら見ていました。

翌日6月7日の朝7時30分のことです。空襲警報が鳴り、電車が止まりました。踏切番のおじさんが大きなバケツに火のついたカラ消しを入れて、お昼の弁当をあたためておられました。「玉川（注：石井さんの旧姓）、火にあたりなさい」と言われたので、兵隊さんとおじさんと3人で火にあたっておりました。少し肌寒い日でした。

兵隊さんはこの近所の人らしく、戦地に行く前に家族にお礼を言いに来られていました。その後1時間ぐらいしたら、飛行機の爆音がしました。この頃は、毎日アメリカの飛行機が、京都に向かって私たちの上を飛んでいましたので、その音だと思っていました。ところがいつもと音が違うので今日の音はおかしいと思ったとたん、「ゴウーっ」と、「ゴウー グワーン」となりました。何が起きたのか分からず、そのままその場にしゃがみこみました。5秒ぐらいすぎて目を開けますと、真っ暗で何も見えません。

二度三度と目を開けましたが、まだ見えません。そのうち、やっとあたりが見えるようになりました。踏切番のゲレット（※詰所もしくは待機所のような小屋）の窓ガラスは棧ごと無くなって、掛かっていた大きな丸い時計も飛んでしまって無く、いつもお昼のお弁当を温めていたカラケシを入れたバケツはひっくり返って中身は散らばっていました。

いつの間にか、私の右手首のところから、血がダラダラと滴り落ちていました。一緒にいた兵隊さんは、そのあたりが暗いうちにどこへ行かれたのか、姿が見えず、いなくなっていました。ふと我にかえて、駅員としての責務を思い出しました。切符の束や売り上げの入った黒いかばんが気になって、私のゲレットへ走りました。すると窓はなく、骨だけで、切符もお金も裏のホームの水源池の手前に転がっていました。もう少し飛んでいたら、水源池に入ってしまったところでした。そのあたりは、南方駅の手前あたりから淡路駅の手前までの広範囲に深さ2メートル、幅2メートルくらいの水源池が広がっていました。黒いかばんを拾い上げて、私のゲレットに戻ろうとすると、アメリカ軍の飛行機が1機で飛び回ってきました。私の専用の防空壕に入ろうとしたら、中には近所の人が入っていて、入れません。仕方がないので、入り口の人の背中へくらいついていました。外からは私の背中が丸見えの格好になり、いつやられるかわからず、びくびくしながら時間が経つのを待ちました。右をみると、近所の水源池と水源池をつないでいる陸橋の下に、近所に住んでいた住友金属の夜勤男性がネルの寝巻き姿で立っていました。その寝巻きから血がダラダラと流れているのが見えました。すると、間もなく「ドドオーッ」と地震のような振動がして、防空壕の内壁がザラザラッと落ちました。防空壕と言っても、土を掘ってあるだけです。中

の広さは畳1畳ぐらいです。すると、防空壕の奥から「アイゴー、神様タスケテください」「アイゴー、神様タスケテください」「アイゴー、神様タスケテください」という声が3人から聞こえました。近所に住んでおられた韓国の人です。

私はすぐに踏切のおじさんのところへ行こうと頭を上げますと、防空壕のすぐ上は焼夷弾でぼうぼうと燃えていました。焼夷弾は、落ちたところと火の粉が飛んだところはよく燃えます。それを見て一旦、足がすくみましたが、逃げないとだめなので、立ち上がって踏切のゲレットへ行こうとしたら、馬を下水の橋の下へ入れて逃げてきた馬方さんを、馬が追いかけて上がろうとしていました。私はそれを尻目に踏切を渡っていたら、飛行機の音がしたので、「あっ、敵機だ」と思って何か隠れる物を探して左を見たら、電信柱が1本あったのでそこへ行き、顔を前にすぼめて隠れておりました。

### 履きなれない下駄で避難

まもなく飛行機は行ってしまったので、踏切のおじさんから「淡路へ逃げよう」と言われたので、走りかけたら、線路の右側に直径10メートルぐらいのアリジゴクが出来ていました。そのほら穴には、自転車が1台はまっていました。人影はありません。

私はその日、下駄をはいていました。京都行きの改札を担当していた伊藤さんが、その日の朝に「今日は身体検査があるので京都へ行きますが、下駄を履いてきてしまったので、靴を貸して」と言われて貸していました。私は靴と交換した伊藤さんの下駄を履いて逃げるのです。その下駄は炊事場用ではなく、歯の薄い高さのある下駄でした。まともに歩けません。P51が1機で追いかけてきますので、2人で線路の上を歩いたり、細い道へ降りたりしながら、淡路へ向かって走っていました。そしてうっかり、30センチぐらいのドブ川に足を入れてしまいました。足を上げると、下駄が片方ないのです。そのまま片足だけ下駄をはいて、淡路の近くまで行くと、左側に長屋があったので、隠れることができないかと近づくと、ナツパ服に赤腕章をはめた警防団の人が私たちに向かって、「あんたら、そこらうろろせんといて、あぶないやないか。あっちへ行け」と言いました。がっかりして少し行くと、左側に麦畑があったのでそこへ入りました。しかし、人がたくさんいて、隠れても意味がありません。座り込んでいたら頭がやられるなど思って寝そべると、今度は足をやられるかなと思って、座ったり寝そべったりを繰り返していました。すると、背中へバラバラと何かがかかりました。私は「やられた！おかあさん、サヨナラー」と言って、スウーっと意識がなくなりました。

そして数分経った後でしょうか。「玉川、逃げよー」というおじさんの呼ぶ声で気がついて、頭を上げました。「ヤアアア、助かった、ありがとう」と言って、淡路の駅の方を見ましたら、淡路駅の駅長さんが、1号線に停まっていた十三行きの電車の屋根に上がって、焼夷弾の火を消しておられました。この駅長さんは、各駅の視察巡回に行かれる時に首を振って歩かれるので、「首ふり駅長」というあだ名がついていました。

おじさんは「ここも危ないぞー、向こうへ行こう」と言いました。淡路駅は、梅田方面行きと、天六方面行きの2つに線路が分かれています。片足は裸足で、片足は下駄をはいてカタシュ、カタシュウと鳴らしながら歩いて2筋の線路をこえて、東淡路の商店街へ行きました。商店街の入り口に着いて、びっくりしました。建物は下がお店で、2階が住まいになっていましたが、その2階の住まいの窓ガラスが全部ないのです。アメリカ軍の機銃掃射か、爆風のしわざだったのでしょう。

商店街の通りが、こっぴみじんに割れたガラスの破片で絨毯を敷いたようになっていました。その上を、片方の下駄も捨てて裸足で歩きました。商店街を抜けたところで、おじさんは「わしは京都へ帰るから、ここで別れよう」と言い、上新庄駅の方へ向かわれました。私は阪急吹田駅の方へ歩き始めました。まわりは静かで、稲の穂が6分ぐらいの高さになっています。「この静けさは何だろう。今まで何があったのか」と思いながら、真っ黒の顔のまま、裸足でとぼとぼと歩きました。

### 父親がつくってくれた昼食

吹田駅に行きますと、駅員さんが迎えてくれました。「崇禅寺駅がやられたと聞いたが、よく無事だったね。顔が真っ黒だ。顔を洗いなさい。タオル貸したげよ」と言ったあとで、「これ履き」と出してくれたのは、ハワリ（※板草履？）といって、畳草履の裏に横幅5センチ、長さ3センチ、高さ2センチぐらいの木板が4つ貼ってある履物を貸してくれました。そのヤツワリを履いて、歩いて10分ぐらいの自宅に帰りました。すると、住友金属に勤めていた父が、「日本の憲兵が来て、日本がこの戦争に負けるから仕事にならないと言われた」と会社から帰ってきていました。父は「お前、幽霊と違うか、崇禅寺の駅がやられたと聞いたが、爆弾と駅と一緒に吹っ飛んだと思っていた。足あるか」と私をしげしげと眺めました。「お父さん、私は大丈夫だったよ」と言うと、「そうか良かったなあ」と安心したようで、「お昼のごはんは食べたか?」と。「私はまだです。朝の7時半に空襲警報が鳴って電車が止まったので、弁当は来なかった」と答えると、「お昼ご飯出し

たげよ。一服しなさい」と言い、父の炊いてくれたお昼ご飯をいただくと思って見てみると、青い“お菜っ葉”ばかりで、米粒は探さなければなりませんでした。それをいただいて、夕方の5時に淡路駅へ通勤のために行きました。電車が止まっているので、歩いて行きましたが、神崎川の鉄橋がどうしても渡れなくて、川の3分の1ほどのところまで行ったり来たりしておりましたら、前を渡っていた中学生が戻ってきて、私の手を引いて渡ってくれました。淡路の駅へ行きましたら、駅長が私を見てびっくりした様子で、「玉川、生きていたか。駅員に見に行かしたら崇禅寺駅はゲレットがつぶれていたし、爆弾と一緒に吹っ飛んだと思っていた。よく助かったなあー」とおっしゃいました。そこでも一服しなさいと言われて、上がりますと畳の部屋が一室あり、女性の駅員さんのずぶ濡れの遺体を2体寝かしてありました。私は一礼して奥へ行きました。

### 謎の乗客

空襲後も、しばらくは崇禅寺駅の勤務が続きました。電車があまり来ない時間帯に、ひとりで勤務していたときの事です。京都行きの電車が来ましたので、走って向かいの改札に渡って立っていますと、電車から降りて来られたお客様の中に、洋服ダンスを縦に割ったような人間の高さくらいの物が2つ見えました。何を運んでいるのかと思いながら見ていますと、電車は行き、私の前にその大きな物が止まりました。そのとたん、ぱっと中身が開いたので見てみると、中には素っ裸の人が2人入っていました。男性か女性かだったかは分かりません。そして、すぐに閉じられてしまいました。よく見ると、灰色の布団を頭から巻いておられたのです。私はびっくりしてしまいました。切符のことは言わずに通しました。その方たちも黙って通っていかれました。私は心の中でその人たちに頭を下げました。服は焼夷弾で焼かれたために裸だったのではないのでしょうか。悲しい思い出です。

### 8月14日と15日の淡路駅にて

後日、勤務地が淡路駅に変わりました。私はそこで改札係をしていました。8月14日の事です。「ボンボン」と音が聞こえてきましたので、「今どこがやられておりますか」と駅員さんに聞きましたら、「今は大阪の森ノ宮だ」と教えてもらいました。この日、森ノ宮にいた12歳くらいの学童たちが、大勢亡くなりました。なんという悲しいことか。あと一日早く終戦していたら、彼らは死ななくてよかったのにとすると、残念でした。

8月15日のお昼には、ラジオから天皇陛下の泣いている様な、のどのつまるよ

⑨石井 富恵さん

うなお声で「日本国が戦争に負け、アメリカに降伏をする」という放送が流れてきました。日本はどうなっていくのかと不安でいっぱいでした。しばらくすると、近くの会社の人たちが改札にやって来て、長蛇の列ができました。日本が負けて、仕事にならないのでみな帰宅するために駅へ来たのです。

みな、私たちに「あんたらアメリカが入ってきたら何をされるかわからんよ。怖いから、気をつけや」と言って、肩をポンとたたいて通っていかれました。

崇禅寺で体験した空襲は、私の人生で一番恐ろしい体験でした。今でも昨日のことのように思い出します。戦争は絶対にダメですね。

東淀川区最高齢が語る日中戦争



二村 良介(にむら りょうすけ)さん(103) 明治44(1911)年 名古屋生まれ。小学6年生まで名古屋で暮らし、その後大阪へ。福島区にあった肌着の製造工場で働いていたが、日中戦争で朝鮮半島へ出兵した経験を持つ。東淀川区最高齢で現在、東淀川区内の介護老人福祉施設で暮らす。最高齢表彰の際に、区長に戦争体験を話したのがきっかけで今回のインタビューが実現した。

昭和12(1937)年8月1日、大阪にあった第四師団の輜重兵(しちょうへい・兵站を担当する日本陸軍の後方支援兵科)の要員として招集されました(当時24才)。大阪港から貨物船の一番底に200頭の馬、その上に弾薬や食料を積み込んで朝鮮の釜山に上陸したんです。そこから平城へ向かって歩きました。

輜重兵は歩兵の後ろからついて行って、弾薬やら食料なんかを運ぶのが仕事だったんです。「お前は足が長いから馬に乗れ」って言われて、馬に乗って編成しながら移動しました。昔は畑仕事を馬にさせてたんです、そんな馬を東北の方から連れて来て、朝鮮に連れて行ってました。むこうは道といっても、畑の間の溝みたいなものでした。当時は雨季だったので地面はどろどろで進むのに苦労しました。

その時にちょうど天津の日本租界で若い日本兵がたくさん殺されて、その応援で天津にも行くことになったんです。



## ⑩二村良介さん

そこで戦闘になるんですが、中国は女性の兵隊も多くてね。向こうから機関銃持って襲ってくるんです。中国兵は蒋介石やなんかに訓練されているから強いですわ。それと戦ったんですが、仲間の兵隊もようさんやられました。撤退するのに死傷した兵隊を連れて帰ろうと思うのですが、腕のないものもあったし、首のない死体も多くて。ズボンのバンド（バックル）の裏に兵隊の番号をつけていたから分かったんです。

隊列は夜中に移動するんですが、空に輝いている北斗七星を目印に南へ南へとすすみ、無事釜山にたどり着き内地に戻ることができました。そこから再編成してもう一度天津を目指そうと思ったところに、大東亜戦争が起きました。船はみんな南方作戦で出払っていて、以来僕は出兵する機会はなかったのです。

=====  
今回のインタビューには、良介さんの四男のお嫁さん（緑さん）とお孫さん（愛さん）に立ち会っていただいた。「8月になるとよく戦争の話聞かせてくれます。いつもだいたい今回の話と一緒に話ですよ」とのこと。約1時間の中でも何度も繰り返され、70年以上経っても鮮明な記憶のようである。

さらに「写真好きの兵隊の仲間がフィルムを隠して持って帰ってきた」という当時の写真をご提供いただいた。





浪商高校、戦後初の全国高校野球大会優勝



島田 雄三(しまだゆうぞう)さん(85)写真左。昭和5(1930)年大阪江戸堀生まれ。浪華商業学校野球部では4番ショート。卒業後は早稲田大学野球部、社会人チームで選手兼監督等を務めた。宝塚市在住

山本 英夫(やまもとひでお)さん(85)写真右。昭和5(1930)年大阪心斎橋生まれ。浪華商業学校5年生から野球部マネージャーに。卒業後は住友倉庫に勤務。川西市在住

大正15(1926)年から昭和38(1963)年まで東淀川区淡路にあった野球の名門、浪華商業学校(現在:大阪体育大学浪商中学校・高等学校)。昭和21(1946)年夏、戦後初の全国中等学校優勝野球大会(夏の高校野球大会)にて優勝の栄光に輝いた。当時の野球部員だった島田さんと野球部マネージャーだった山本さんにお話をうかがった。

島田:当時大阪では、野球といえば浪商、京阪商業学校、日新商業学校、市岡中学校、興國商業学校が有名校。私は野球が好きで浪商に入学しました。入部したとき部員は40名ほど。1年生(昭和16年)のころは戦争も激しくなくて、まだ野球が十分楽しめる雰囲気やったね。

山本:というのもね、行軍といって行進の練習をさせられるんやけど、野球部は練習することが鍛えることになるので、行軍が免除されていたんです。

## 学徒動員と大阪大空襲

戦況が厳しくなり、2年生（昭和17年）の後半に文部省から学校へ野球中止の通達があった。浪商の学生は学徒動員として、クラスごとに4カ所の軍需工場へ勤務することになった。

島田：私のクラスは桜島の日立造船。当時はお国のためにと一生懸命でしたが、もう野球ができないんだとさみしい気持ちはありました。工場の行員さんには野球が好きなのもいたから、道具を持って行ってキャッチボールくらいは楽しんだかな。ほかの工場でもそうだったでしょ？

山本：うん。僕は尼崎の油谷重工業で、運動場になる砂場があったので行員さんと野球してたな。

島田：当時は毎日のように空襲があって、工場への行き返りに焼夷弾を受けた人を見るのが辛かった。焼夷弾は六角形で、落ちるときにザーっと音がしてね。

山本：爆弾でなくてほとんどが焼夷弾やったね。空襲がきたら電車が止まるので、尼崎から歩いて帰るのが嫌で。防空壕をぱっと見たら死体が転がっててね。昭和20年3月13日の大阪大空襲の日は、自分の住んでいた心斎橋は焼夷弾の直撃は無かったんですが、よそへ落ちた火がまわってきて家が焼け出されたので、新橋のほうへ逃げました。

島田：あの日はみんな川沿いを走り逃げてましたよ。幸い、家族は田舎へ疎開してましたし、同級生にもこの空襲で亡くなった人はいなかったんじゃないかな。近所の人には亡くなられた人もいたと聞いています。

島田：当時はお国のためにみんな一所懸命でした。私は4年生（15歳）になったとき兵隊に志願して、大津の飛行予科練の後、陸軍少年飛行兵学校へ行きました。しかし、8月1日に入校して8月15日には終戦を迎えました。

山本：15日間の兵隊さんやな。僕は終戦の日は学徒動員の工場がお休みで、友人と宝塚植物園にいました。公園の中で放送が聴こえて、ああ、やっとおさまったんかな、終わったんやなという気持ちでした。

島田：私は兵学校にいて、教官は「米軍を竹やりで打ってやる！」と言う人もいて、自分もそうすべきかなと思いましたが……。まあホッとした面もありましたね。日々を生きるために明け暮れたという状況でしたから。

### 野球部の再開と戦後初の全国大会

淡路にあった浪商の校舎は焼失。戦後は東淡路小学校の校舎を間借りして授業が再開した。野球部は4年生（昭和20年）の後半ごろに再開。同級生や後輩はみんな疎開先から戻ってきて、部員は30名ほどだった。都島の高倉にあった鐘紡のグラウンドを借りて練習をしたり、プロ野球で活躍する先輩が練習道具を持ってきてくれるなど、浪商OBの協力が大きかったそう。二人が5年生になった昭和21（1946）年、夏の大会が再開する。

山本：僕はちょっと変わってましてね、野球部に入ったのは5年生になってから。家も学校も焼け、ヤミ市の間を通学しているような環境で不良になったらいけないと思って。野球が好きやから入れてくれってお願いしました。

島田：監督のタケダ先生が白羽の矢を立てたんです。名マネージャーでしたよ。

山本：野球キチガイとはいえ、名門浪商に5年生から入れてくれなんてよく言ったものです。当時うちには平古場という伝説のピッチャーがいて、負け知らずでした。

島田：1試合につき平均10以上もの三振を取ってたな。

山本：ドロップ（カーブ）が得意な速球派。ギッチョ（サウスポー）なのでみんな打ちにくくて、当たっても取りにくい球ばかり。そうするとショートの島田君が後ろで守る。肩が強かったから。

島田：勢いのない打球が多かったな。

山本：春ごろから京都や神戸の学校と交流試合をはじめて、6月から7月中は大阪予選。予選決勝戦の相手は日新商業でした。

島田：相手も強かったので緊張した。よほどフンドシ締めていかんと全国大会に行けないぞと思いました。

山本：3対2でやっと勝って全国大会へ。大阪府下54校の代表です。当時は甲子園球場が進駐軍に接収されていたので、西宮球場で開催されました。浪商は淡路や茨木など地元の学生が多かったから、盛り上げてくれたな。

島田：お客さんも終戦後で娯楽に飢えてたんでしょう、連日超満員で。客席が白いシャツで真っ白になっていたのを覚えています。また野球ができることがとにかくうれしくて、対戦相手の学校とも、「お前らもここまで勝ち進んできたんやな、よかったな、一生懸命やろうで」と声をかけあって。みなニコニコしてましたよ。やるほうも見るほうも球場が一体になって。

山本：日本人は野球が好きだしね、戦後復興の象徴という感じでした。負けた連中が帰るときに、（滞在合宿用の）米を勝ち進んだチームに渡してくれました。食糧難の時代、厳しい監視の目をくぐり抜けて持ってきていた米でした。

山本：第一試合の和歌山中（和歌山県立桐蔭中学校・高等学校）が強かった。優勝候補だったので負けるかと思いましたが、なんと11対2で勝ちました。1回にツーダン（ツーアウト）から3番のキャッチャーの広瀬がレフトオーバーのランニングホームラン。4番の島田くんがライト線へ三塁打を打って、平古場がレフト線へ二塁打。僕はスコアを付けてたので鮮明に覚えています。

島田：第二試合が函館中（北海道函館中部高等学校）、第三試合が東京高等師範付属中（筑波大学付属中学校・高等学校）。決勝戦が京都二中（京都府立鳥羽高等学校）、これは投手戦で3対0で勝ったんだっただけか？

山本：2対0やで。

島田：そうそう、ホームインしましたよ。決勝戦は帽子の上に「必勝」と書いたハチマキをしてね。

山本：決勝戦だけはフリーバッティングをさせてくれるんですが、なんとプロになっていた浪商OBの今西投手が投げってくれたんです。当時は厳しいプロアマ規定がなかったから。

山本：優勝した後が面白い。お祝いに、阪急電車が電車を貸切にして、西宮球場から箕面の合宿所まで送ってくれたんです。当時は西宮球場あたりが立体交差してたんですが今津線の今津よりの線路脇に仮設で板張りのホームを作って、電車を着けてくれて。びっくりしました。石橋駅で折り返すときには、駅員総出で迎えてくれて。でも、今から10年前に先輩と二人で改めて当時のお礼に行ったのですが、阪急電車にはその記録が残っていないそうです。

島田：トラックに乗って優勝旗を持って大阪市役所へ挨拶に行ったことも覚えています。

山本：進駐軍に優勝旗を赤旗に間違われたね。

### 卒業後の進路

島田さんは浪商卒業後、早稲田大学へ進学。当時は六大学野球が盛んで、浪商の同級生、平古場投手が慶応大学、キャッチャーの広瀬が法政大学へ進学し、対戦相手となる。早稲田卒業後はプロ野球・大映スターズで6年間セカンドで活躍。引退後は北海道羽幌町の羽幌炭鉱のチームに監督兼選手として指導者になり、都市対抗戦まで連れていった。「幸せな野球人生でした」と語る。

山本さんは浪商卒業後、住友倉庫へ就職。島田さんらの活躍する早慶戦は3日間応援に出向き、試合のスコアを付けていたという。島田さんいわく「最高のマネージャー」。今でも決勝戦を戦った京都二中の選手とは交流があり、高校野球の

OB会へは浪商代表として出席している。

誕生日が一日違いという二人は今でも仲がよく、年に数回は会っているそうだ。

#### 若い世代へ伝えたいこと

山本：できたら、忍耐、辛抱を持つことかな。戦争は、自分の力ではどうしようもできないという出来事だったから、当時の人は忍耐強かった。

島田：今は恵まれているということに感謝し、母校や郷土のために、一生懸命がんばってほしい。

=====

戦後初の野球大会優勝のエピソードについては、5分程度の映像資料がある。(浪商高校OB会)

戦時中の村の暮らしを支えたお寺の娘さん



若林 幸代(わかばやし ゆきよ)さん(94) 大正 9(1920)年 大阪江口村(現在の南江口)生まれ。江戸時代から続くとされる光照寺に生まれ江口村で育つ。大隅小学校(現・大隅西小学校)に通い、市内女学校卒業後はお寺の仕事に従事。東淀川区在住。

このあたりは「大阪の北海道」と言われてたんです。それくらい畑や苗代ばかりでした。小学校の思い出といえば、主人とは同級生だったんですが、満州国との親善に贈る絵として主人がギターやマンダリンの原寸大の絵を書いていたんです。それが手に取れば音がなりそうなくらい上手だったのを覚えています。

6年間小学校に通って、その後市内の女学校に4年間行きました。卒業してからは光照寺でお寺の仕事をするようになりました。農繁期にはお寺で託児所をして子どもを預かって、多い時は20人くらいの子どもの面倒を見ていましたよ。井高野からも来ていたくらい。

戦争がはじまったのは私が20才くらいの頃でしょうか。このあたりは田舎なので疎開する必要はなかったんです。近くの空き地に防空壕を掘ってあたりは穴だらけでした。防空壕といっても土を掘りっぱなしの穴でしょ。嫌がる母に入ってもらうのに苦労したのを覚えています。

お寺の娘ということもあって、隣に住んでいる町会長さんから色々と頼まれて

仕事を引き受けていました。一つは空襲警報が発令したら「空襲警報、は一つれーい」とメガホンを持って江口村をまわる仕事。当時は電気もないし、(灯火管制で)村中真っ暗で何も見えないけれど、私は勝手を知っているから全然怖くなかった。

他にも兵隊さんが外泊する時に必要な証明書を発行したりもしていましたよ。知り合いに、橋本の遊郭で一泊したことを隠すため「江口村で二泊したという(嘘の)証明書を作ってくれ」と言われて、作ってあげたりもしました。命がけで軍隊行っている子の言うことくらい聞いてあげようと思ってね。

あとは配給物資を配る手伝い。分けるのも難しくてね。一人で暮らしているお家には、どうしても少なくなる。あまりにも少なくて、その人から「手でも炊けゆうんか」と言われたこともありました。戦時中もこの辺は畑が多くて自給自足みたいなもんやったので、麦やじゃがいも、さつまいもなんかはよく食べましたよ。戦時中でも法要を欠かすことはなかったし、お布施(昔はお米)でお仏飯を作ることができました。私自身はあまりひもじい思いをしたことはなかったと思います。同級生たちは軍需工場なんかに働きに行ったりしていたけど、私は村の役をしていたこともあって行かなくてよかったのかもしれないね。

空襲で怖かったのは、河内の6番(淀川岸についていた番号で対岸の守口あたり)に爆弾が落ちた時のこと。私は布団に入っていたんですが、あまりにも大きな音で、思わず布団かぶって「やられたー」って叫んだのを覚えています。後で聞けば、その辺りで戦地から帰って来た遺骨にろうそくを立てていたそうで、その光をめがけて爆弾落としたんとかうかなんて言っていました。

神戸の空襲を淀川の土手から見ていたとき、言うべきことではないですけど、花火よりきれいやなあと思った記憶もあります。江口村は空襲の被害はなかったけれど、近くだと江口橋あたりに一度落ちて、畑のじゃがいもやたまねぎが全部吹き飛んだと聞いています。空襲で家を焼かれた人がここらに逃げて来たこともありましたね。近くで家を建てられるような場所を教えてあげたりしました。

戦争が終わった時は何とも感じなかった。たぶん役所から知らせが来たんでしょね。とにかくもう防空壕に入らんでええんやと思った。それが一番嬉しかったですね。でも防空壕を埋めるのは大変でした。

戦争を知らない若い世代へ伝えたいこと？ 戦争は怖い、嫌なもん。それだけ。嫌やけど招集されたら行かないといけない。

=====



<取材メモ>

お孫さん付き添いのもとでお話をうかがった若林さん。メガホンを持って空襲警報を告げてまわった情景や対岸に落ちた爆弾に驚いた時の様子など、それぞれの記憶は鮮明で、とても気さくに当時の思い出を明るく語ってくださった。小学校で同級生だったというご主人（故人）は戦争で中国へ。抑留され戦後1～2年後に帰還し、縁あって光照寺に婿養子にやってきたという。今回のインタビュー原稿は主に彼女自身の戦争体験のみについて編集してまとめたものである。約1時間のインタビュー終了後「おばあちゃんお疲れじゃないですか」という問いかけると、「そんなもん、これくらいで疲れるようやったらとうに死んでる」とユーモアあふれる返答をいただいた。

## 不発弾が変えた生きかた



藤野 高明(ふじの たかあき)さん(76) 昭和13(1938)年 福岡市生まれ  
7歳のときに福岡の自宅そばの小川で拾った不発弾により、両手と両目の視力を失う。59年大阪市立盲学校(現・大阪市立視覚特別支援学校)へ入学し、64年に卒業。72年から同校の非常勤講師を経て、社会科教師に。著書に「あの夏の朝から」「楽しく生きる」など。東淀川区在住。

### 1. 福岡の赤い空

私が見た戦争は、福岡の実家で体験した福岡空襲です。昭和20(1945)年6月19日の夜中のことです。空が真っ赤にただれるように焼けた北の空を見ていたら、日付が変わったぐらいの時間に、同じ方角から大勢の人が列をなして逃げてくるんですよ。ときどき「水をくれ」と言うので、母親が「どうぞ、どうぞ」と言って一生懸命水を汲んで渡していた、緊迫した様子が目に焼き付いています。ときどき高射砲のドーンという発射音がしていましたが、200機以上もいる敵機には、なす術もなかったようです。

実家は福岡市の中心より南のほうにあったので直接の被害はありませんでしたが、翌日父親が福岡の親戚のところを回って「みんな焼けとう」と言って帰ってきました。この空襲では1000人以上の方が亡くなりました。

私にとって心の傷になったのは、何日か経ってからの学校での出来事です。登

校すると、福岡市に収容されていたアメリカ人捕虜を空襲の報復に処刑したという話題で持ちきりでした。先生や高学年の生徒が「捕虜を殺した」と、とくとくと語っているわけです。小学生が「捕虜」という言葉を得意げに使うことに、子どもながらに違和感を覚えました。殺された捕虜が空襲したわけでもないし、抵抗もできないのに、かわいそうやなと思ったものです。

## 2. 昭和21年7月18日の朝

私が通っていた小学校は福岡市立高宮小学校といいました。そのそばを小さな川が流れていて、よく遊びにいきました。川には、たまにベルトのバックルや機械の部品が捨てられていて、子どもには宝の山のような存在でした。昭和21(1946)年7月18日のことです。その川で、5歳の弟と単四乾電池のような形をした銀色の金属の部品を拾いました。「これ何かいな？」なんて言ってね。しかしそれは、不発弾だったのです。片方に穴が開いていて、中には粉のようなものが詰まっている。地面にコツコツと当てても出てこないから、釘でかき出そうとしたら、それがきっかけで爆発しました。弟は同じものをポケットにも入れていたせいで爆発が移って即死でした。私は命こそはとりとめましたが、両手と両目の視力を失いました。

不発弾は後から来た警察が全部持って帰りましたので、犠牲が増えることはありませんでしたが、戦後の混乱期だったこともあって、捨てた人はただ引越しただけ。残された私たちには何の補償もありませんでした。

高宮小学校のすぐ隣には福岡県立盲学校があり、そこに通う学生の姿をいつも見ていました。まさか自分がその門を叩くことになるとは思いませんでしたが、実際に行ってみると、両手がなければ点字が読めないしマッサージや按摩の仕事もできないからと言って断られてしまいました。結局、13年間学校に通うことができないまま20歳になりました。

## 3. 1冊の本から広がった世界

転機になったのは、15歳から20歳まで国立筑紫病院という病院の眼科に入院したことです。そこで12回にわたる開眼手術を受けました。あるとき隣の病室にいた4歳の女の子が「藤野の兄ちゃんお手てないんやて」と言うんです。誰が教えたんやと足音も荒く入って行って、半分泣きながら「自分らも手無しになってみる」と大声でどなったことがありました。そういうことが1週間に何回か起こって、あとから恥ずかしいなと惨めな気持ちになるんです。主治医から「あなたの母親が一番心配しているんだよ。いまのあなたを見たら一番悲しむんだよ」と

言われて、我に返りました。私の父は15歳のときに亡くなり、母親が1人で化粧品の行商をしながら5人の子どもを育てていました。母は、私が学校にも行けな  
いし、働くこともできないと思っていたようで、弟や妹が私を大事にしてくれる  
ように願い、私のためにできるだけお金を残そうとしてくれていたのです。

不自由な暮らしの心の支えは、視力が回復するという希望だけでしたが、18歳  
にもなるとその見込みがないことが分かってきました。学校にも行けなくて、行  
き場のない気持ちになり、自殺を考えたりもしました。

そんな私の気持ちを察したのか、3歳くらい上の看護学生がよく部屋に遊びに  
来てくれました。あるとき「私にできることはある？」と訊ねてくれたので、本  
を読んでほしいと頼みました。でも、世の中にどんな本があるのか分かりません。  
見栄を張るわけにもいかず、「あなたが読んで気に入ったものでいい」と告げると、  
「あんまり面白くないかもしれないけど、最近読んで感動した本だよ」と言って、  
北条民雄の「いのちの初夜」を読んでくれました。

ハンセン病のために24歳の誕生日の前に亡くなった、筆者の自伝的な内容です。  
患者たちの悲惨な状況の中に、人間の生きる姿を見たような気がして、世間を知  
らなかつたなあ、荒れている場合ではないなあ、と思いました。「どうやった？」  
と聞かれて、ただ「読んでもらってよかった」と答えました。

その本を通して、両手の不自由な人たちが舌や唇を使って点字を読んでいるこ  
とも知りました。今風に言うと、想定外のこと。点字が、私の光になった瞬間で  
した。それなら自分もと思って、同室に入院していた盲学校の生徒に「点字教え  
ちゃらん（教えてくれない）？」と頼みました。

ひとつひとつの点字を覚えるのは簡単でしたが、実際に読むのは難しい。目が見  
える人には、字を覚えることと読むことは一度にできると思いますが、私たち  
は違います。最初に「読める」という実感がつかめるまで、半年くらいかかりま  
したね。途中で投げ出しても、入院中だったのでやり直す時間があつたのです。

社会科や国語は人との関わりや耳学問で理解できますが、算数や英語は基礎か  
ら積み上げないと分かりません。13歳の男の子から分数の足し算の問題を出され  
ても分からず、教育を受けていないことに大きな劣等感を感じました。

そこで本を読んでくれた看護学生に頼んで、毎晩夕食後から消灯時間まで勉強  
を教えてもらいました。病院や病室の人たちも、勉強していると知ると静かに集  
中できる環境をつくってくれました。学べるということがただ嬉しく、楽しい時  
間でした。

#### 4. 大阪への道のり

福岡の盲学校へは、入学を頼みに何回か訪ねていきました。最後に行ったのは19歳のときです。点字が読めるようになっていたので、少し自信もありましたが返事は同じでした。大阪盲学校には私の好きな音楽のコースもあることを知り、手紙を出しました。19歳で中学部に入るということで、過年齢を理由に断られるかもしれないと思っていると、学校からの返事は「1年かけて受け入れ体制を考えたい」というものでした。そして昭和34(1959)年2月に大阪から福岡の病院へ2人の先生が派遣され、出張試験をしてくれました。5科目のテストを受けて、さらに日常生活を8ミリフィルムで撮影されました。学力を見るのに加えて、身の自立をしていることを確認する目的だったのです。

試験の結果は、合格。「天にも昇る気持ち」というものを味わいました。福岡から大阪まで急行で12時間、特急でも10時間かかる道のりですが、遠くで1人で暮らす心配や不安より、期待でいっぱいという気持ちだったことを覚えています。母が私を大阪まで送ってくれて、晴れて大阪盲学校へ入学できました。そのとき、母は44歳、私は20歳でした。

大阪市立盲学校は当時本町にあり、私は寄宿舎に入って通いました。先生も同僚も、普通に接してくれたのが嬉しかったですね。後から聞いた話ですが、私の入学に対して、多くの先生が心配されていたということでした。その中で、恩師の岩花先生は私の入学に賛成してくれたばかりか、大阪での身元引受人までかってでくれたのです。7年間学校へ通えないという艱難辛苦のあとに、そんな嬉しいことがありました。

大阪の印象と言えば、まず言葉です。「どうしたの」と言うのに、福岡では「どげんしたと」と言って、荒っぽくてごつごつした感じやけど、大阪弁は「どないしたん？」でしょう。ずいぶんやわらかくて耳あたりが良かったです。うどんもたこ焼きもおいしいし、交通の便がいいのも気に入りました。

盲学校を卒業しても学びたい欲求は変わりませんでした。私の障害を知ると入学を断られるかもしれないと思い、日大の通信部には目が見えないことを隠して入りました。忸怩たる思いでしたよ。しかし通信部でも大学での講義があるので、登校すると、大学は十分な受け入れ体制でないことを理由に大学を辞めさせようとなりました。学友たちが支援を名乗り出てくれたおかげで、何とか在学できました。

## 5. 東淀川区での暮らし

東淀川区へ盲学校が移ったのは昭和 38 (1963) 年 5 月。私が卒業する前年のことでした。最初は東成区に住んでいたのですが、地下鉄やバスを乗り継いで通いました。

東淀川区に引っ越してきたのは 85 年 3 月です。当時子どもたちは小学校の 6 年生と 3 年生で、二人とも近所の豊新小学校へ通いました。東淀川区に住んでよかったのは、何よりも職場に近いということです。自宅から 800 メートルぐらいだったので、歩いて通勤しました。盲学校の教職員も生徒も近所に結構住んでいるから、地域の人たちにはいろいろ協力いただいて、お世話になっています。

妻とは近所の瑞光寺や松山神社へ行きました。淀川の河川敷を歩いたりもしました。赤川鉄橋では貨物列車のすぐ横を歩いて渡れたので、運よく列車が通ったら橋ごと揺れるのが楽しくて、子どもたちと「ラッキー！」と大喜びしたものです。妻も歩くのが好きだったから、新大阪から歩いて帰ってきたり、吹田の高校に入学した娘の通学路を確認しようと歩いて往復してみたり。

盲学校が移ってきたころは田んぼが多くて、田植えの時期になるとカエルたちがやかましいくらいに鳴いていました。それが、翌年になると団地ができてしまって、あのカエルたちはどこへ行ったんだろうと子どもたちと心配したものです。夕食を食べた後、妻とカエルの声のするほうへ歩いたりもしました。

世界史が好きだったので、学校では社会科の教師になりました。30 年間教えて、関わった生徒は 1000 人ぐらいになるでしょうか。ほとんど名前は覚えていますよ。小中学校の先生なら、生涯で教える生徒が 1 万人にのぼる人もいと聞きます。

## 6. 若い世代に伝えたいこと

戦後 70 年という機会にこのような調査をされることは意義のあることですね。戦後 80 年には私は 86 歳になります。今は元気ですが、10 年後の自分がどうなっているかは分かりません。今は戦争を体験した人の声を聞く最後のチャンスと言われていますが、その通りですね。

今は生き方に自信を持つのが難しい時代と言われますが、つらい時期を乗り越えるには、自分だけではダメです。恩師や家族や友達の力を借りてできるんです。

私の場合は、自分がくじけたら母がどんな顔するかなあ、と思ったり、友達が助けてくれたことが支えになっています。

教え子たちは、よく「先生は、学校は、企業は自分に何をしてくれますか」と言いますが、それは違くと教えています。自分の「何をしたいのか、何ができるの

か、どうするのか」という考えが先になれば、道を切り開くことはできません。

「努力すれば必ず報われる」という言い方がありますが、それは嘘です。報われないことのほうが多いのです。だからと言って、何もしなければ報われる可能性もなくなってしまいます。努力していれば、どれかは叶えられます。

生徒たちは「先生と比べたら自分は贅沢だ」と言うことがありますが、「人と比べるのはやめとき」と言っています。その論法で言ったら、私の立場はどうなるのでしょうか。自分よりもっと不幸な人を探さなければいけません。

ハンディキャップの足し算なんてつらいものです。自分らしく生きるのがよいのであって、人と比べる必要はないのです。百人百様の生き方があるはずで、障害があると生きづらい面も不自由なことも多くて、つい自分より不幸な人を引き合いに出して慰めがちなのですが、そんなことはしないほうがいと伝えていきます。